様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　 ５ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１３３３３

研究課題名（和文）近世初期の京都・大坂・伏見の関係からみた首都の多元性

研究課題名（英文）A Study of Plurality of Capital Cities in the Early Modern Period from the Perspective of the Relationship between Kyoto, Osaka, and Fushimi

研究代表者
谷　徹也（TANI, TESTUYA）

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：１０７８１９４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世成立期における首都の多元性を、豊臣秀吉の「首都」である京都・大坂・伏見の関係から考察したものである。従来の近世「首都」論では、首都は単一であることを暗黙の前提に議論がなされてきた。しかし、秀吉や当時の人々の認識を分析した結果、豊臣期の「首都」はむしろ複数が併存していたことが常態であり、そうした観点から江戸時代の「首都」についても捉える必要があることを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、東京への一極集中のあり方が見直されつつあり、文化庁の京都移転など、首都機能の分散に関する議論が活発化している。本研究は、日本において、著名な古代の福都制以外の時期にも「首都」が複数存在した可能性を指摘した。こうした成果は、今後の首都のあり方を考える上でも重要な論点を提示しえたものと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examines the plurality of capitals during the establishment of the Early Modern period in terms of the relationship among Toyotomi Hideyoshi's "capitals" of Kyoto, Osaka, and Fushimi. Conventional theories of "capitals" in the Early Modern period have been based on the implicit assumption that there was a single capital city. However, as a result of analyzing the perceptions of Hideyoshi and the people of the time, it was common for multiple "capitals" to coexist during the Toyotomi period, and I argue that it is necessary to view the "capitals" of the Edo period from this perspective as well.

研究分野：日本近世史

キーワード：豊臣政権　中近世移行期　都市史　首都論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近世首都論の現在　日本史において、首都を正面から論じるようになったのは、近年のことである。その発端となったのは、1995 年の日本史研究会大会におけるシンポジウム「首都の比較史」であった（『日本史研究』404、1996 年）。以来、首都論は歴史像の通時的核として新たな位置づけを得て、現在に至っている。

この研究動向で主導的役割を果たしたのは、同シンポジウムでも主題として扱われた近世の首都論であった。しかし、近世の首都をどのように捉えるのかについては、京都首都論（布川弘「近代日本における首都の役割と特質」『日本史研究』476、2002 年）、三都論（横田冬彦「近世社会の成立と京都」『日本史研究』404、1996 年）、江戸首都論（大石学『首都江戸の誕生』角川書店、2002 年）の三つの見解に分かれている。

三つの見解のいずれの立場を取る論者も、近世初期における国家権力による編成が近世の首都のあり方に大きな影響を及ぼしたと見ており、豊臣期・徳川初期の首都は近世首都論の理論的前提といえる。

例えば、横田氏は三都論の立場にありながら、豊臣期については、関白秀次と伏見城の登場によって首都が京都と伏見に二重化したものの、「秀次の粛正によって一元化されねばならなかった」としている。また、秀吉死後の徳川家康の大坂城移住についても、「公儀の大坂への統合」と評価しており、首都の基本形態を単一のものと考え、多元化してもすぐに統合されると見なしている（横田冬彦「豊臣政権と首都」『豊臣秀吉と京都』文理閣、2001 年）。徳川初期の首都についても、大石氏は、関ヶ原の戦い後に徳川家康が江戸を首都として選択したと評価している（前掲大石著書）。これらを総合すると、当該期の首都は京都→伏見→大坂→江戸と単線的に推移したと考えられているのが現状であろう。

２．研究の目的

１に記した通り、既往の研究では、当該期の首都は単一という前提のもとに論が進められたため、近世において国政や経済など様々な側面で異なる都市が中心的役割を担っていた点が正しく評価されてこなかった。

しかし、世界では複都制や陪都制が多く見られ、特に中国では前漢や唐における長安と洛陽が著名であり、複数の首都の併用は東アジア世界において特殊ではない。日本においても、古代では複数の都（飛鳥と難波の複都制など）があったことが知られている。これらのことを踏まえると、豊臣期・徳川初期においても、首都は単一であるという固定観念を捨て、その多元性にこそ光を当てる必要がある。

当該期の首都を複線的・体系的に捉えることは、近世首都論、ひいては日本における首都のあり方そのものを捉え直すことに繋がるだろう。

３．研究の方法

本研究では、京都・伏見・大坂（さらにはそれらの前後に類似の役割を有したと思われる諸都市、淀・名護屋、江戸・駿府など）を複数の首都として捉え、それぞれの役割と関係性を検討した。この検討を通して、近世初期における首都の多元性、江戸時代の三都との継承関係の存否を解明することを目指した。

具体的な作業としては、豊臣期の京都・伏見・大坂の関係性を、国政・権威・経済・軍事・文化の諸要素から、いずれに重きが置かれているのかを分析した。その際、①天下人である秀吉の意図や認識と、②当時の社会での「首都」の受け止め方や評価の二つの観点を踏まえ、検討を進めた。

４．研究成果

まず、京都に関しては、当初は聚楽第を中心に、政治と儀礼・伝統文化に重きがおかれていたものの、次第にその国家的位置づけは相対化されたことを研究の予備的考察において明らかにした（谷徹也「豊臣政権の京都政策」『日本史研究』677、2019 年。谷徹也「大徳寺黄梅院にみる近世京菩提寺の成立と存立」『中近世武家菩提寺の研究』小さ子社、2019 年）。特に政治に関しては脱色され、儀礼・文化都市（伝統都市）化してゆく様相を捉えることに成功し、諸大名が京都屋敷と伏見屋敷、大坂屋敷を併用していたことも指摘した（谷徹也「蒲生氏郷論」同編『蒲生氏郷』戎光祥出版、2021 年）。

こうした検討の結果、従来の研究ではいわゆる「京都改造」を京都の近世化の起点として大きく位置付けてきたが、実際には「京都改造」は都市としての平準化を示すもので、首都としてはむしろ意味合いを低下させたと結論づけた（谷徹也「豊臣政権の拠点城郭と「首都」」『令和 2 年度京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（伏見編）』京都府文化スポーツ部文化政策課、2021 年）。

ついで、伏見に関しては、その前提として淀や名護屋が存在することを指摘した。また、政治・武家文化の意味合いが強いことを確認した（谷徹也「秀吉の「首都」伏見」『京都を学ぶ　伏見

編』ナカニシヤ出版、2022 年）。

その過程で、近世の江戸の特徴とされる大名屋敷・喧嘩・火事が伏見の特徴としても強く表れることが判明し、武家の「首都」として江戸の前史に位置づくと結論づけた（谷徹也「首都としての伏見」尾下成敏・馬部隆弘・谷徹也『京都の中世史６　戦国乱世の都』吉川弘文館、2021 年）。

大坂については、当初は軍事的要素が予想されたが、堺との関係から、経済や茶湯文化の色が濃いということが判明した（前掲谷徹也「豊臣政権の拠点城郭と「首都」」。なお、成果の一部は 2022 年度中に発表する見込みが立っている）。

最期に、これらの成果を近世の「三都」論と比較すると、豊臣期の京都・伏見・大坂の関係は、ストレートに江戸・京都・大坂の「三都」につながるものではなく、なお名護屋や駿府などの要素を考慮する必要があることを見通した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 谷徹也	４．巻 98
２．論文標題 書評 小酒井大悟著『近世前期の土豪と地域社会』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 民衆史研究	６．最初と最後の頁 85-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷徹也	４．巻 677
２．論文標題 「朝鮮三奉行」の渡海をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 立命館文学	６．最初と最後の頁 239-260
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 谷徹也	４．巻 令和2年度
２．論文標題 豊臣政権の拠点城郭と「首都」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『令和2年度京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（伏見編）』	６．最初と最後の頁 22-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計5件

１．著者名 谷徹也編著	４．発行年 2021年
２．出版社 戎光祥出版	５．総ページ数 386
３．書名 蒲生氏郷	

１．著者名 早島大祐、山田徹、小木英梨奈、衣川仁、大河内勇介、西島太郎、林晃弘、谷徹也、平 出真宣、萩原大輔、小原嘉記、芳澤元、高木純一、亀山佳代、大田壮一郎、坪井剛	４．発行年 2019年
２．出版社 小さ子社	５．総ページ数 607
３．書名 中近世武家菩提寺の研究	

１．著者名 尾下　成敏、馬部　隆弘、谷　徹也	４．発行年 2021年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 288
３．書名 京都の中世史６　戦国乱世の都	

１．著者名 太田浩司編（谷徹也）	４．発行年 2022年
２．出版社 宮帯出版社	５．総ページ数 370
３．書名 石田三成　関ケ原西軍人脈が形成した政治構造	

１．著者名 京都学研究会編（谷徹也）	４．発行年 2022年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 182
３．書名 京都を学ぶ【伏見編】	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関